脱施設化ガイドライン案への世界のコメント（2022年6月）　No.61

**カレル（チェコ共和国）**

**Written Submission**

**to the UN Committee on the Rights of Persons with Disabilities**

**on the Draft Guidelines on Deinstitutionalization, including in emergencies**

Submitted by: **Mr. Karel**

With the support of [RYTMUS](https://rytmus.org/) and

[Validity Foundation – Mental Disability Advocacy Centre](https://validity.ngo/)

Email: validity@validity.ngo

**緊急事を含む脱施設化ガイドラインについての障害者権利委員会への書類提出**

提出者: カレル

サポート: RYTMUSおよびValidity -精神障害権利擁護センター

2022年6月30日

カレル氏は40歳の男性で、父親に育てられ、成人後は10年間施設で暮らしてきた。彼はまた、法的能力を制限されていた。2022年時点で、カレルは12年間ワンルームアパートに住み、週に3～4時間福祉サービスを利用している。彼は2つの仕事を持ち、ホッケーを観戦するために街に出るのが趣味である。

カレルは、ガイドラインと接し、「国連」というものがあり、チェコ共和国は「その協定」（障害者権利条約）に従わねばならないという情報に驚いた。これは彼にとって重要な情報であった。彼は、誰もこのことに取り組んでおらず、チェコ共和国は 施設を廃止するために何もしていないと考えた。カレルにとって、（ガイドライン案の）紹介の文章は難しく、アシスタントはいろいろな用語（国連など）を何度も説明しなければならなかった。カレルは、「一部の施設では、職員が一部の人々にひどい扱いをする」という文章に共感した。

カレル氏は、ガイドラインに記載されている施設のデメリットに同意している。

カレルが問題視している点は以下の通り。

* 体制（朝7時に食堂にコーヒーが入ったポットが置かれ、夕方6時になると下げられる。自室にはポットを置けなかった。）
* 好きな時に外出できなかった。
* さまざまな禁止事項（ビール1本買うのも禁止）
* 施設からの退所が不可能（ソーシャルワーカーは、社長でさえ私を退所させることはできないと言った...）。
* 人が知らないところで決定されること（保険会社が変更され、余分な薬が渡された...）。
* 一か所に大勢の人がいる（大変である。廊下の騒音、臭い）。

同時に、カレルはガイドラインのいくつかの点について懸念を示した。

* 施設が提供する活動に参加する義務はなかったが、同時に、誰も私に他にすることを提供してくれなかった。
* 友だちや恋人ができる可能性はある。
* 私はすべての施設を廃止するつもりはない。多くの人に囲まれ、決められたプログラムをこなすことが心地よい人もいれば、施設での生活に慣れ、実際そこが唯一の家だという人もいる。退所することは、彼らにとって非常に難しく、時には悲しいことかもしれない。

最も重要な情報は、チェコ共和国政府がどのような法律を作り、どこに資金を投入するかにかかっているということだった。カレルは、すべての障害者が投票し、現状を変える手助けができれば助かると考えている。

注：本投稿で提示された見解はカレル氏のものであり、カレル氏が協議プロセスに参加することを可能にした団体の意見を必ずしも反映するものではない。

（翻訳：佐藤久夫、尾上裕介）